

ひ、又た、べと急ていふことを、もなりしなるべし。かくておもへば源氏君のかのた、らめの花のごと云々と歌ひ給へる後に、またかの姫君のもとにおはしてかへるさに、一條院へ紫君のもとにおはして、例の姫君の鼻の色につけたるたはぶれごとして立いで給ふところの詞にはしがくしのもの紅梅いととくさく花にていろつきにけり、くれなるのはなぞあやなくうとまるゝ、梅の立枝はなつかしけれど、いでやとあひなくうちうめかれ給ふとみえたるも、さきにたらめの花の色を歌ひたまひしに、この紅梅をみて歌よみし給へる趣の、ひ、さあひてぞきこゆるかし。○下略

花壇綱目 下 梅珍花異名の事

一重の白梅	梅くの内輪、うす色	中輪、なり輪
八重の白梅	梅くの内輪、大輪あり	大梅
咲分の紅白	八輪、大輪、壹重、中輪有り	黄梅
とうじ梅	早咲の中輪、なり大輪	也
ゆうしゆく梅	中輪あり	大
本りうし色	八重、中輪、なり	實座論
玄だれ梅	小輪、なり	白色、中輪、うす
軒端梅	中輪、なり	南京梅
讃岐紅梅	中輪、一重	匂ひ高し
松浦梅	紅、八重、中輪	難波梅
かうだひ寺	如針、黄色、茶、	うす色、中輪
ぬき白	中輪、なり	大輪、あり
からむめ	なり大輪	出雲、紅梅
備中紅梅	八重、中輪の	一重の
加賀紅梅	八重、中輪の	豊後梅
楊貴妃	輪紫、大輪、實	大筑紫
桃梅	白、一重、中輪	白の